

# 彩り

冬号  
2021年度



「Art」

- 特集「突撃！養成校のアート事情 -目白大学の場合-」
- ねえ、きいて！「アートは、ひととわたしをつなぐもの」
- 私の声「『お魚アーティスト』小久保昭広さん」
- 教えて SAOT!!「部局・委員会について教えて!! 第5弾」
- OT ギャラリー 等

No.06

突撃!

# 養成校の アート事情

—目白大学の場合—

作業療法士の養成校では、授業のひとつとして「アート」を学んでいます。今回は埼玉県内にある養成校・目白大学の授業を取材させて頂きました。いざ、突撃!

突撃!

## 目白大学の授業に潜入せよ!

目白大学では「基礎作業学演習」という科目を通じて作業療法士のルーツであるアートに関わる作業活動を実際に体験し、考える機会を設けています。どの作業活動でも、ただ作業を行うだけではなく、道具の管理や患者様に提供できるように工程や手順の理解、道具の使用方法についても学びます。

### 基礎作業学演習Ⅰ

木工・陶芸を行います。作る楽しさに触れてもらい、自身が楽しむこと、作業の特性について知ってもらうことを目的としています。



### 基礎作業学演習Ⅱ

革細工・さをり織りを行います。作品づくりを通じて精神面や動作分析など自己分析と友人との違いなどを比較しながら行います。



突撃!

## 講師の先生にインタビューせよ!



### 【さをり織り講師】加々美真理子先生

#### 『さをり織り』を始めたきっかけ

大学時代にテキスタイルに興味があり、最初から最後まで自分一人で作り上げることがやりたいと思い探していたところ、出会ったのが「さをり」の適塾でした。その時はさをり織りがいわゆるデザインしてその通り作るという一般的な手織りとは一味違うことは知らずに始めました。

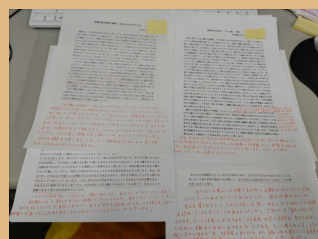
#### 『さをり織り』の魅力

適塾には年齢や障害の有無を問わず、いろいろな方が織りを楽しみにいらしていました。本当に人それぞれ思いの作品を目にして、自分には無かった発想や色使いにハッとさせられたり、常識にとらわれずに素直にありのままの織りのパワフルさに圧倒されたり。「小手先の整ったきれいさ」ではなく、「その人そのものから出てくる世界」がかたちになっていることにとても心を動かされました。

創始者の城みさをさんの教えの通りに、さをり織りをしている仲間同士、上手下手とか、誰が先生で偉いとかではなく、フラットに作品を通してお互いの世界を素直に感じて、刺激しあい、認め合える空気があり、人をつなげる力を持っている、ということが大きな魅力だと思います。“織り”という物を作る楽しさだけではなく、織りを通じて人と関わる面白さを教えてもらいました。

#### 講師をして感じたこと

限られた授業時間の中で、さをりの「教えないで引き出す」という指導法を実行するのは難しいですが、様子を見ながらちょっとした声掛けや、織り方のヒントを伝えたりしながら、その人らしさが出てくるのを待つようにしています。初めは戸惑っていた学生さんたちも、織っていくうちにそれぞれいろいろなことを感じて下さっているようで、いつも最後の作品発表とレポートを拝見するのを楽しみにしています。



▲レポートへのコメント。いつも丁寧に書いてくださいます。

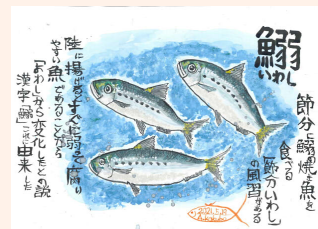
# 私の声

—作業療法体験談—



## 今回の話し手は、小久保 昭広 さん

この本物そっくりの魚の絵、どうやって描かれていますか？ 実は筆を口にくわえて描いています。作者の小久保さんは頸椎硬膜外膿瘍術後により頸髄損傷を負われ、首から下の手・足・体に麻痺があります。今回は作品が生まれるまで、また小久保さんのアートへの想いを伺いました。



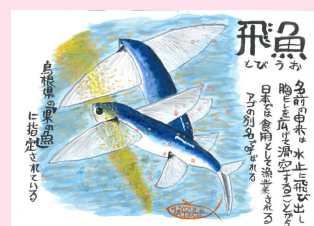
### ◆『アート』をはじめたきっかけ

今から3年半前、同じテーブルに座っている利用者さんから勧められたのがきっかけでした。以前のダイアリー<sup>(1)</sup>では毎週水曜日に絵画教室の時間があり、絵が好きな人たちが自由に参加し楽しんでいました。その時は絵画を専門とする職員がいらして分からないところは自由に教えてもらう事が出来ました。

自分で絵なんか描けるか自信なんかありませんでしたが、社長<sup>(2)</sup>が背中を押してくれたので、やる気が（10%位かな～）出ました。最初は墨で白と黒の濃淡を使い描き始めました。

### ◆『アート』にまつわる思い出深いエピソード

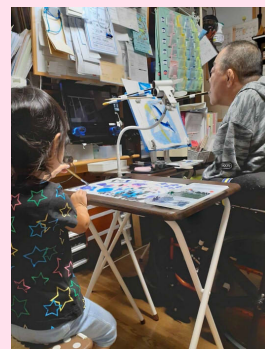
病前は、自営の和食店で35年間板前をしてました。魚は毎日、嫌ってほど沢山見てきました。そのため、魚だったら何となく描けると思い、魚だけを描くことに決めました。しかし、やっぱりマウススティック<sup>(3)</sup>くわえて、絵を描くことがいかに難しいかを思い知らされ、一時はやっぱり辞めようかと思ったところを「描き続けなさい」と社長からの言葉があり、続けることができました。それから2年が経った今は、色をつける事に興味が湧いてきました。



▲小久保さんの作品。細部まで忠実に描かれており、まるで目の前で魚が泳いでいるかのようです。

### ◆作業療法士とのエピソード

最初はマウススティックに筆をつけて描いていました。そのうち、使う筆が増え、スティックの数が足りなくなり社長に相談してみたところ、スティックを作ってくれる作業療法士に出会いました。絵を描くことにとても意欲が湧き、気持ちが段々高ぶったことを覚えています。スティックのクオリティーにも、流石作業療法士の仕事だなと驚きでした。口にくわえた時の感覚や素材も、特にこうしてくれとか垂有夫（あふに）にしてくれとも言いませんでしたが、流石ですね。



### ◆小久保さんにとって、『アート』とは

私は才能がある訳でもないし、絵なんか中学生以来描いてませんでした。見る側、描く側の価値観だと思います。見る人が喜んでくれたらそれで良いと思っています。見る側が思った通りに価値をつければ良いと思います。私はこの数ヶ月間、絵を描くことが楽しい時間になりました。好きなように自由に楽しみたいです。

### ◆今後の目標について

「為せば成る、為さねば成らぬ 何事も」の言葉のように描き続けることが大事だと思います。でも、色々な事に挑戦してみたいです。まず孫の似顔絵を描いてみたいです。私の場合は首から下が麻痺しているのでできることが限られると思いますが、最近、障害を負った方達の色々な作品を目にする機会が増え、中にはこの作品本当に障害者が描いたの？と驚くことが多々あります。自分も障害を負った人たちに勇気や喜びを与えられたら嬉しいです。



▲お孫さんのゆのちゃん。最近「じいじのマネ！」と言って筆を口にくわえてお絵かきをはじめたそうです。

(1) 小久保さんが通っている「(株) ハート&アートリハビリ&デイサービス ダイアリー」のこと。  
(2) 上記デイサービスの代表者・茂木さんのこと。利用者の方はみんな「社長」と呼ぶとのこと。  
(3) ペンを持つなど手を使うことが難しい方が、口にくわえて使う道具のこと。



# 「アートは、ひととわたしをつなぐもの」 ～老年期・療養病棟にて思うこと～

- 報告者 -

大生病院

作業療法士 細井 三貴子さん

アートは『表現者・物と鑑賞者が相互に作用し精神的な変動を得ようとする活動』と説明されています。

患者様で右片麻痺と失語症があり、左手のみで創作する方がいます。作る事はお好きなのですが、完成するとすぐ自室の棚にしまい、人に見せることは拒みます。その後オンライン面会の日、私は思い切って「みんなに見せましょう」と伝えました。渋々でしたが承諾され、ご家族皆さまから「すごいね！きれいだねー」とほめられ、満面の笑みでした。

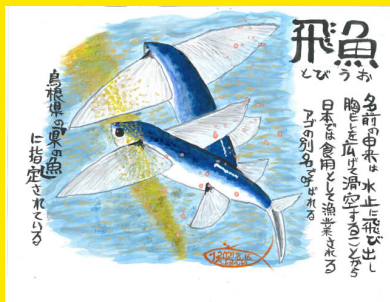
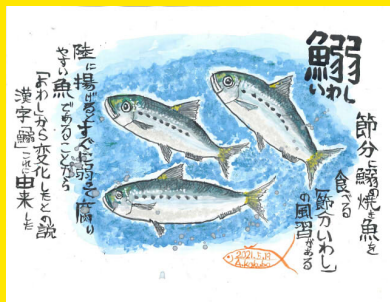
また『色カルタ』の集団活動では、色を選びその理由を話す方、それを聞く方達、お互いに楽しそうです。

自分の表出した作品や言葉が、人の心を動かして、自分も楽しくなる！作業療法ってアートだなあと思いながら、今日も患者さんの隣で創作活動を見守っています。

## OT ギャラリー — みんなの作品展 —

「私の声」

### 小久保昭広さん — 作品展 —



### 表紙イラストを担当 清水風花さん — 作品展 —



みなさんの投稿お待ちしております！

## ★ 各コーナーの募集要項 ★

《投稿フォームで応募！》

QRL または URL から投稿フォームにアクセス！必要事項を入力しご応募ください。

【 <https://business.form-mailer.jp/fms/b631815e129531> 】

※投稿フォームで応募後、広報部よりメールにてお返事させていただきます。

《お問い合わせ》

投稿をはじめ、広報誌に関してなにかございましたら、

埼玉県作業療法士会 広報部専用メール【[saitama.ot.kouhou@gmail.com](mailto:saitama.ot.kouhou@gmail.com)】まで！

